

1. 河正雄コレクション ～ ブロンズ「刻画・海の幸」

1904（明治 37）年に画家の青木繁が滞在し『海の幸』（国重要文化財）を描いた小谷家住宅（館山市指定文化財）は、10 年の保存運動により青木繁「海の幸」記念館として開館。これに賛同した美術メセナの河正雄氏（秀林文化財団理事長・光州市立美術館名誉館長）は、彫刻家・船田正廣作の同寸大の塑像を 5 体铸造し、2016（平成 28）年、日韓美術友好の証として 5ヶ所に寄贈した。

河氏は、「『海の幸』作品が、連帯の意味、友情の意味、生きる意味、幸せの意味を、永遠にメッセージを放つことであろう」と述べている。



* 光州市立美術館分館 河正雄美術館（韓国光州市）

* 青木繁「海の幸」記念館（千葉県館山市）



* 靈岩郡立河正雄美術館（韓国靈岩郡）


* 青木繁旧居（福岡県久留米市）



※河正雄氏のメッセージは 本誌 p.3 に掲載

<https://awa-ecom.jp/bunka-isan/section/marugoto-050-010-020/>



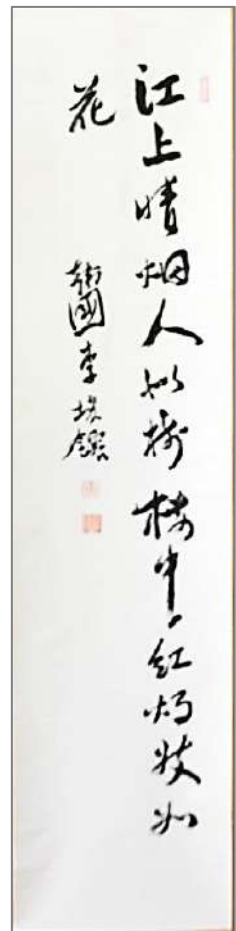
<p style="text-align: center;">河正雄コレクション 刻画「海の幸」</p> <p>この作品は1904年、千葉県館山市で制作された青木繁(1882年～1911年)の代表作「海の幸」を、2004年原寸大の彫刻にしたブロンズレリーフである。作者は長野県上田市出身の船田正廣(1938年生)。 この作品は韓国の光州市立美術館分館河正雄美術館、靈岩郡立河正雄美術館、金熙秀記念秀林アートセンター、そして日本千葉県館山市小谷家住宅、福岡県久留米市青木繁旧居に日韓の美術友好交流の架け橋として、韓国財団法人秀林文化財団の寄贈により、戦後70年・日韓国交正常化50周年記念として各施設に設置されている。</p> <p style="text-align: right;">2016年3月13日</p>	 <p>하정웅 컬렉션 청동 부조(浮彫) 「바다의 행(幸)」</p> <p>이 작품은 1904년, 일본 지바현(千葉県) 다테야마시(館山市)에서 제작된 아오키 시게루(青木繁, 1882년~1911년)의 대표작 「바다의 행(幸)」을 나가노현(長野県) 우에다시(上田市) 출신의 후나다 마사히로(船田正廣, 1938년생)가 2004년 실물 크기로 제작한 청동 부조 작품이다. 이 작품은 한국의 광주시립미술관 분관 하정웅 미술관, 영암군립 하정웅 미술관, 김희수 기념 수림아트센터, 그리고 일본 지바현(千葉県) 다테야마시(館山市)의 코다나기(家)주막, 후쿠오카현(福岡県) 구루메시(久留米市) 소재 아오키 시게루(青木繁)가 예전에 살던 집 등에 설치되었다. 수림문화재단은 광복 70주년과 한일국교정상화 50주년을 기념하여 한일 미술 우호교류의 일환으로 이 작품 제작을 지원하였다.</p> <p style="text-align: right;">2016년 3월 13일</p>	<p style="text-align: center;">Ha Jung-wong Collection Bronze Relievo, 「Luck of the Sea」</p> <p>Funada Masahiro(born in 1938) who came from Ueda of Nagano-ken in Japan created this full-scale bronze relievo in 2004, which is the remake of the original masterpiece 「Luck of the Sea」 of Aoki Shigeru (1882~1911) that was completed in Tateyama of Chiba-ken in 1904. This art work is set up in Ha Jung-wong Museum of Art annex of Gwangju Museum of Art, Yeongam-gun Ha Jung-wong Museum of Art, Kim Hee-soo Memorial Soorim Arts Center in Korea, Kodanike's house in Tateyama of Chiba-ken and Aoki Shigeru's former house in Kurume of Hukuoka-ken in Japan. This art work was manufactured and installed by the support fund of Soorim Cultural Foundation in Korea. Soorim Cultural Foundation hopes it will play a role as a bridge for Korea-Japan cultural exchange to celebrate the 70th anniversary of Korea's Independence Day and the 50th anniversary for normalization of diplomatic relations between Korea and Japan.</p> <p style="text-align: right;">March 13, 2016</p>
--	--	---

2. 韓国王族・李俊鎔の書

* 青木繁「海の幸」記念館・小谷家住宅の「七言対句」 (小谷家蔵)

千葉県館山市布良の小谷家住宅(館山市指定文化財)より、「韓国 李俊鎔」の署名入りの書が発見された。同住宅は1904(明治37)年夏、画家の青木繁が滞在し『海の幸』(重要文化財)を描いた家であり、2016(平成28)年に青木繁『海の幸』記念館として開館している。

七言対句で「江上 晴烟人似樹楼中紅燭妓如花 韓国李俊鎔」と書かれ、名前と雅号「石庭」の押印がある。意味は「大河の上の明るい霞の中に立つ人は樹に似ている。楼閣にゆらめく紅い灯の中に立つ遊女は花のようだ」という内容。



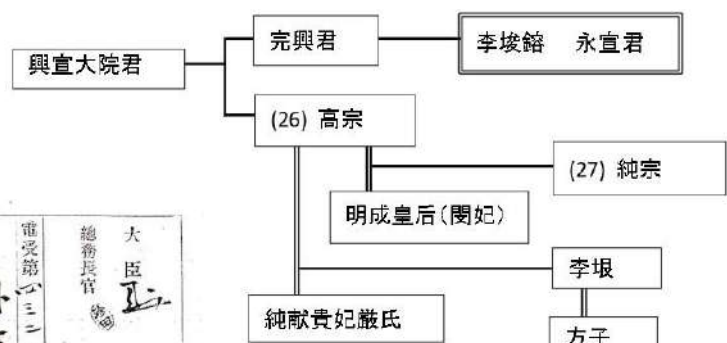
* 鋸山 日本寺山門の扁額

鋸南町の日本寺は、725(神亀2)年に聖武天皇の勅詔を受けて、行基菩薩によって開かれた関東最古の勅願所。鋸山の南側斜面10万坪余りの自然豊かな境内に、日本一の大仏(本尊の薬師瑠璃光如来)、百尺観音像、千五百羅漢石像群などがある。仁王門の扁額「乾坤山」は、李俊鎔の書による。



李俊鎔は、朝鮮王朝第26代皇帝の高宗の甥。王位継承問題に巻き込まれ、国王廃位の陰謀者として流刑になり、1896(明治29)年日本に留学、翌年欧州へ視察。1899(明治32)年から8年間、日本に亡命し、日本政府の監視下で北条町(館山市)に滞在中の1902(明治35)年に、韓国からの刺客による暗殺未遂事件が起きたことも外務省の公文書にて確認できる。

1907(明治40)年に身分回復し、朝鮮に帰国して永宣君に封じられた。1912(明治45/大正1)年に父の没後、公位を継承し、李俊公と称した。墓所は、韓国京畿道南楊州市の朝鮮王陵。



※ 日本の梨本官家より嫁ぐ。



公文書 (アジア歴史資料センターより)

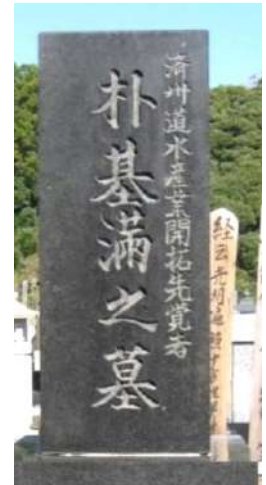


李俊鎔の墓所

3. 済州島からきた海女の墓

和田浦（南房総市）という漁村を中心とする房総各地には、戦前から出稼ぎにやってきた韓国済州島の海女たちが多く住んでいた。慣れない異国で苦勞しながらも、地元房総の海女と一緒に夏は海に潜り、冬は花を作りながら共生していた。戦時下には、軍の命令で火薬の原料となるカジメやアラメなどの海草を採取し供出していた。漁業権が許可されたのは1世のみだったため、継承した子孫はいない。直接の聞き取り調査をしたルポタージュ『海を渡った朝鮮人海女～房総のチャムスを訪ねて』（金栄・梁澄子/1988）は重要な証言史料である。

在日済州道民協会の元会長・李徳雄氏（鋸南町在住 2024 年没）は、済州海女のハルモニ（老婆）を世話し、安房と済州の海女交流に尽力していた。



鴨川市の長興院は、「済州道水産開拓先覚者 朴基満之墓」をはじめ、多くの韓国人が眠る墓地となっており、ここから見下ろす海景は済州に似ているという。

4. 関東大震災で「朝鮮人を保護せよ」

1923（大正 12）年の関東大震災では、館山湾沿いの町は 98% 壊滅した。山間部から支援者が駆けつけ、官民一体となって救援活動にあたった。『安房震災誌』によると、郡当局が最も苦心したのは、不安と失望に満ちた人心を平静に導くことであったという。東京から朝鮮人騒ぎ(※)が伝わってきたが、その影響を危惧した安房郡長の大橋高四郎は、不穏な噂を打ち消し、「この際朝鮮人を恐れるは房州人の恥辱である」「もし朝鮮人が郡内にいるなら恐怖しているに相違ない、十分の保護を加えるべし」という旨の掲示を出した。この配慮により「安房に忌まわしき朝鮮人事件の一つも起こらなかった」と特筆されている。

※ 朝鮮人騒ぎ=東京や千葉県北で、朝鮮人が暴動を起こすという流言飛語により、多くの朝鮮人が殺害された事件で、その数は 6,000 人を超えるといわれる。

5. 関東大震災で殉死した柳悦多^{よしさわ} ～ 柳宗悦の兄

浅川伯教・巧兄弟により朝鮮古美術に開眼し、朝鮮人を敬愛して、朝鮮総督府の弾圧に対して批判したり、景福光化門の保存にも尽力した柳宗悦の兄は、柳悦多といい、館山に住んでいた。早くに父を亡くし、叔父（母の弟）の嘉納治五郎に育てられ、嘉納塾で柔道を習得したという。

水産講習所（後の東京海洋大学）を卒業後、実習場のあった館山に定住し、2 隻の漁船をもち遠洋漁業に従事、朝鮮海域へも出漁していた。科学的に完備した日本初の漁船「幸智丸」を設計するなど、漁業界では欧米でも著名であったという。その傍ら、安房中学（後の安房高校）で柔道や野球の指導をしていた。講義中におきた関東大震災では、生徒らを避難させた後、校舎が倒壊し犠牲となっている。

なお、柳兄弟の義兄・加藤本四郎は朝鮮仁川の総領事、義弟・今村武志は朝鮮総督府内務局長で朝鮮史編集会委員を歴任している。

6. 韓国馬山に「千葉村」を建設した千葉県の漁師たち

千葉県水産組合連合会は朝鮮への漁業移民を討議し、1905（明治 38）年、釜山近くの馬山近郊に「千葉村」を建設した。その先遣隊として現地調査に赴任したのは、連合会の役員であった正木清一郎である。船形町長（館山市）でもあり、水産製造や漁業に従事し、水産振興に尽力した。船形漁港にある胸像の揮毫は、東京養育院安房分院（船形学園）の院長であった渋沢栄一である。



『朝鮮の千葉村物語』（石垣幸子/2010）

正木清一郎像

7. 近代水産業発展と

韓国浦項にある日本船の供養碑

近代水産業の先駆者・関沢明清は、政府事務官として欧米の万博に参加し、進んだ海外の水産技術に驚き、米式捕鯨銃や鮭鱒の人工ふ化、缶詰製造法などを日本に導入した。その功績を不朽に伝えるための顕彰碑は460名の拠出金により館山に建てられている。

水産教育の重要性を説き、1889(明治22)年に大日本水産会水産伝習所(後の東京海洋大学)を開校して所長となり、初期から館山・南房総への実習をおこなう。自ら範を示すため退職して館山に定住し、関沢水産製造所を設立し、遠洋漁業に取り組み、日本人で初めてマッコウクジラを仕留めた。 関沢明清顕彰碑

関沢明清



1982(明治25)年、外務省の囑託で朝鮮慶尚道・全羅道・忠清道・京畿道・濟州島での邦人漁業を視察し、翌年から再び釜山水産会社を視察している。

館山の北下台には、関沢の顕彰碑があり、その隣には、1903(明治36)年に朝鮮海域で遭難沈没し22名が亡くなった房総遠洋会社の漁船「順天丸」の遭難記念碑がある。

* 水産講習所の訓練船「快鷹丸」遭難記念碑

1897(明治30)年、関沢逝去の年に、水産伝習所は官立の水産講習所となり1901(明治34)年に館山実習場が開設される。館山湾で訓練していた水産教育船「快鷹丸」は、1907(明治40)年にサバ漁調査に出漁し、韓国浦項沖の迎日湾で嵐に遭遇。学生3人と教員1人が死亡するが、現地の漁師らに救助され、生存者は日本から救援にきた巡洋艦「笠置」で帰国した。

遭難直後、現地海岸に木製の供養塔が建立されたが、その後地元住民の金斗植氏の好意で永久寄贈された6.6㎡の敷地に、高さ3m強の石碑に「快鷹丸遭難記念碑」と刻まれた供養塔が1926(大正15)年に建立された。

戦争が終結した1945(昭和20)年、長年にわたる日本の支配に対する反発感情により供養碑は引き倒され、土泥に埋められた。このとき破碎されそうになったところ、地元の古老が「日本の政策とは関係なく、遭難した学生の慰霊碑である」と力説したことにより、碑は破碎を免れたという。

1971(昭和46)年、韓国史学会地方史研究委員であり浦項迎日郡文化財保存委員長の朴一天氏が、このことを知り調査したところ、土中から石碑を発見した。幼なじみの在日韓国人・韓永出氏(当時長崎県島原市在住・長崎県居留民団副団長)に相談したところ、「19歳で渡日し苦勞もしたが、日本人のおかげで生きてこられたので、恩返しのために私費で再建したい」と語ったという。

再建計画は強い拒否反応もあったが、粘り強い説得により当初反対した住民も、合意後は土地の提供や工事に積極的な協力を支援し、20余年の空白時期を経て、記念碑は再び姿を現した。東京海洋大学(旧東京水産大学)の同窓会「楽水会」では、地元住民とともに今なお碑の保存と慰霊を続けている。

* * *

2007(平成19)年9月9日、遭難の碑から100年目を記念して、NPO法人安房文化遺産フォーラム有志は「楽水会」や東京海洋大学関係者らとともに訪韓参詣し、地元住民らと親睦交流を深めた。韓国最東端の岬で漁撈に従事する市民らは、この碑を「海の男の友情の証」だと力強く訴えた。善隣友好を築き、平和学習の大切な素材として語り継ぎたい。



8. 「^{あお}噫 従軍慰安婦」碑

1965(昭和 40)年、深津文雄牧師は、様々な障害をもち自立困難な女性たちが安心して暮らせる婦人保護施設「かにた婦人の村」(以下、かにた村)を1965(昭和 40)年に設立した。

城田すず子(仮名)はここで20年暮らし、心を癒され生きる勇気を得たとき、従軍慰安婦の経験を告白した。戦後40年を経て、世界で初めての証言であった。

戦地で亡くなった仲間を思うと夜も眠れないという。これを受けて、深津牧師は1985(昭和 60)年、施設内の丘の上に慰霊碑を建て、「噫従軍慰安婦」と刻んだ。「噫」とは言葉にならない苦しみをさす。

1988(昭和 63)年、韓国で女子挺身隊・慰安婦問題を調査していた梨花女子大学の尹貞玉(ユンジョンオク)氏が、調査のために「かにた村」を訪れた。城田の証言を聞き、帰国後に報告して、挺身隊研究委員会を設置。後に韓国挺身隊問題対策協議会が結成され、代表を務めた。

1990(平成 2)年、韓国の公共放送局 KBS がドキュメンタリー番組『太平洋戦争の魂～従軍慰安婦』を制作し、城田の独白証言を紹介した。韓国内はもちろん、世界中に大きな世論を巻き起こした。番組内で深津牧師は、「外国の女性たちがいたと聞いている。もし本当なら日本は謝らなければならない。どうやって謝っていいかわからないが、この碑に謝罪の気持ちをこめた。この番組を通じて、証言者を探してほしい」と述べている。日本では翌年にNHKの衛星試験放送で配信した。

県立安房南高校の世界史教諭だった愛沢伸雄は、平和学習の地域教材として「噫従軍慰安婦」碑を取り上げて、1991(平成 3)年から授業をおこなってきた。この教育実践は、歴史教育者協議会を通じて報告し、『授業「従軍慰安婦」』(川田文子/1998)などに紹介されている。

9. 「名も無き女の碑」

鴨川市の慈恩院に「名も無き女の碑」と刻まれた墓石がある。日本軍の衛生兵だった男性2人が、1973(昭和 48)年に建てた従軍慰安婦の供養碑である。「かにた村」の「噫従軍慰安婦」碑より12年早い。

衛生兵は慰安婦の性病検査をし、兵に避妊具を配布する任務があったという。戦後に出会った2人は同じ体験を共有し、戦地にいた女性たちを憐れんで、ひっそりと慰霊した。

裏面には、「今次の大戦に脆弱の身よく戦野に挺身 極寒暑熱の大陸の奥に又遠く食無き南海の孤島に戦塵艱苦の将兵を慰労激励す 時に疫病に苦しみ敵弾に倒る 戦い破れて山河なく骨を異国に埋むも人之を知らず 戦史の陰に埋る 嗚呼 此の名も無き女性の為小碑を建て 霊を慰む 昭和四十八年十月建立 東京 井谷忠衛」とある。

碑に名前のないもうひとりの男性、鴨川の刈込善一が建立の土地を探したり、碑の制作をしたり、と尽力している。地元だったために敢えて名を残さなかったというが、戦争中の体験や建立経緯はすべて妻に伝えてあり、没後に語り継がれている。

城田すず子



10. 設立 20 年を迎える NPO 法人安房文化遺産フォーラム

～「館山まるごと博物館」エコミュージアムの日韓交流

愛沢教育実践に始まり、戦争遺跡と里見氏稲村城跡の保存運動を経て、2004（平成 16）年に NPO 法人南房総文化財・戦跡保存活用フォーラム（後に改称）を設立した。

設立理念の一つは、戦争や対立を乗り越える「平和の文化」を探求する教育支援とまちづくりを目ざすこと。もう一つは、地域全体を博物館と見立てて、学習・研究・展示・保全などの市民活動を通じて、魅力的な自然遺産や文化遺産を再発見し、活性化を図るエコミュージアムまちづくりの実践である。1970 年代のフランスで提唱され、世界中で取り組まれている。日本では先進事例の山形県朝日町や香川県直島などと並び、NPO 法人安房文化遺産フォーラムの「館山まるごと博物館」が高く評価され、国内外から注目されている。各地から来訪するスタディツアーガイドもおこなう。

<https://awa-ecom.jp/bunka-isan/section/tour/>



2005（平成 17）年には、韓国浦項製鉄西初等学校の児童 20 名のホームステイを受け入れ、日韓子ども交流をおこない、友情を育んだ。2010（平成 22）年の第 9 回日中韓青少年歴史体験キャンプでは、3ヶ国の若者が安房地域の文化遺産を学び、対話を通して歴史認識を乗り越え、東アジアの未来を構築していく事業を共催した。

このとき、通訳を果たした鄭一止（チョンイルジ）氏は東京大学大学院の留学生であり、博士論文のテーマをエコミュージアムをとっていた。韓国では京畿道（キョングキド）が行政施策として「京畿湾エコミュージアム」に取り組んでおり、国内外の事例を研究していたのである。地域まるごと博物館の取り組みの大半は行政主導であるというが、館山の場合は市民が主体的に先導し行政を動かしていった点が評価された。その後、神奈川大学助手を経て、現在は熊本県立大学准教授であり、当 NPO の理事でもある。

この間、韓国でも鄭博士の研究報告を聞いた受講者は、「館山まるごと博物館」に関心を寄せ、彼女のコーディネートにより多くの視察団体が来日した。たとえば、韓国文化体育観光部や同部研究機関、韓国文化観光研究院、水原（スウォン）まちづくりルネサンスセンター、京畿道始興（シフン）市エコミュージアム研究会と同市持続可能発展協議会、釜山大学大学院文献情報学部、慶星大学などなどである。私たちが韓国のエコミュージアムフォーラムに招かれ、事例紹介をすることもあった。

さらに韓国の OBS 放送局は、私たちの平和学習ガイドを取材し、ドキュメンタリー「屋根のない博物館・エコミュージアム」という特集番組で「館山まるごと博物館」の活動事例を紹介している。

<https://awa-ecom.jp/bunka-isan/7026/>



「館山まるごと博物館」はオンラインパンフレット（日中韓）を WEB で紹介している。クリックでめくるように見ることができ、PDF ダウンロードや印刷も可能である。



<https://awa-ecom.jp/bunka-isan/section/np0-04/>

（文/編集：池田恵美子）